

**156** Adriamycin (ADR) 心筋症に対する Loprinone Hydrochloride (LH) の心臓交感神経障害の抑制効果  
高田美貴, 山科昌平, 山崎純一, 森下 健 (東邦大医一内), 高野政明 (同核医学検査室)

ADR 投与によるウサギ心筋症モデルに対する LH の心筋保護作用及び交感神経障害抑制効果について検討した。

生後 3 カ月齢の New Zealand White 種ウサギを用い、生食投与 (A 群)、週 3 回 ADR 静注 (心筋症群=B 群)、ADR と同時に LH 連続投与 (C 群)、ADR を 3 クール投与後から LH 連続投与 (D 群) とし、<sup>123</sup>I-MIBG 心筋シンチを施行した。各群における心筋 MIBG 集積率において、C 群は B 群より高率で A 群に近い値を示した。Washout rate においても、C 群、D 群では改善が認められた。また、H/M 比においても C 群は A 群に近い値を示していた。以上より LH は ADR の交感神経活性異常や心筋障害の予防や治療に有用であると考えられる。

**157** 肥大型心筋症における冠血流予備能の評価  
木下法之, 杉原洋樹\*, 足立芳彦, 中村智樹, 松尾あきこ  
前田知穂\*, 中川雅夫 (京都府立医科大学 二内, 放\*)

肥大型心筋症 (HCM) にて、運動負荷/安静 <sup>99m</sup>Tc-tetrofosmin (TF) 心筋 SPECT より算出した TF 心筋摂取変化率 ( $\Delta$ MTU) の有用性を検討した。対象は正常 20 例, HCM 25 例。最大運動負荷時に TF370MBq を静注, 30 分後 (TF-1) と 3 時間後 (TF-2) に撮像。TF-2 撮像後に TF740MBq を静注し, 30 分後に撮像 (TF-3)。TF-1, TF-2, TF-3 の心筋カウントを各々 C1, C2, C3 とし、 $\Delta$ MTU を次式より算出した。 $\Delta$ MTU =  $\{(C1 \times R - C'3) / C'3\} \times 100$  (R=投与量比, C'3=C3-C2) 正常, HCM の心全体  $\Delta$ MTU は  $57.6 \pm 15.2\%$ ,  $28.8 \pm 18.0\%$  であった。HCM の肥厚部位と非肥厚部位の  $\Delta$ MTU は、 $24.7 \pm 16.8\%$ ,  $32.0 \pm 16.9\%$  であった。25% (正常の平均  $\pm 2SD$ ) を  $\Delta$ MTU の正常下限とすると肥厚部位 25 領域中 15 領域 (60%) で低値を示した。 $\Delta$ MTU により、非侵襲的に HCM における冠血流予備能を評価可能である。

**158** 肥大型心筋症及び大動脈弁狭窄症の心臓交感神経除神経の特徴 -I-123-MIBG 心筋シンチグラフィによる検討-  
中津川昌利, 外山卓二, 星崎 洋, 小坂橋紀通,  
直田匡彦, 磯部直樹, 大島 茂, 谷口興一, (群馬県循セ)  
対照は HCM 20 例, AS 8 例, 健常者 5 例に対し、安静時 TI-SPECT, MIBG 早期像後期像の正面 planar, SPECT を撮像し H/M, washout rate, SPECT(D) より欠損部位と 20 区域 defect score から TDS を算出。また、心エコーにて LVDD, IVS+PWD, EF を比較検討した。【結果】除神経は全例下壁中心, 心尖部は AS より全 HCM, ASH で中隔, Dilate 又 AS で側壁に著明であった。TDS(D) は Dilate で高値, H/M(D) は全例 NC より低値で Dilate で顕著, WR は全例亢進し HOCM で著明。H/M(D) と Dd, EF の相関は AS で強く, HCM で弱かった。【総括】心臓交感神経除神経は各肥大心に特徴があり, AS の心機能に強く関連したが, HCM では心機能障害以外の関与も考慮された。

**159** 各種心筋症における安静時および運動負荷時の両心室の反応性について  
中村政彦 (山梨県立中央病院内) 石川大二 (同放)

心プールシンチグラフィを用いて安静時 (Re) と運動負荷時 (Ex) の両心室 (LV, RV) 機能評価を駆出率 (EF), 拡張期最大充満速度 (PFR) を測定し拡張型心筋症 (DCM), 右室異形成症 (RVD), 肥大型心筋症 (HCM), 正常 (N) 群について比較検討した。DCM では Re の LVEF  $\cdot$  PFR も RVD より低下し Ex の反応性も低下していたが RVEF は RVD が Re, Ex とともに低下していた。RVD は Re の LVEF は N 群と差はなかったが Ex には有意に低かった。HCM は Re, Ex の LVEF は N 群より亢進していたが Re に対する Ex の有意な増加反応が認められず LV  $\cdot$  RV PFR も Re に比して Ex の有意な増加は出現せず両心機能の予備能力の低下が示唆された。

心プールシンチグラフィは各種心筋症で Re の差に加え Ex で両心室に異なった反応性が認められ有用であった。

**160** Indium-111-oxine 標識白血球 scintigraphy を用いた Dressler 症候群の診断

高橋敬子, 大柳光正, 池岡清光, 酒木隆壽, 正井美帆,  
成瀬 均, 岩崎忠昭 (兵庫医大一内), 福地 稔 (同核)

炎症存在部位の確認や炎症活動の評価に有用な Indium-111-oxine 標識白血球 scintigraphy (In-WBC) を用いて Dressler 症候群の診断を試みた。急性心筋梗塞発症約 2 週間後より心膜液貯溜を認め Dressler 症候群を疑う男性 3 例に対し患者自家標識 In-WBC と Gallium-67 scintigraphy (Ga) を施行 (I 期)。また 2 例については心膜液及び症状消失後も施行 (II 期)。3 例とも I 期では In-WBC の集積を認め、Ga では集積を認めない。II 期では全例集積を認めなかった。Dressler 症候群はその病因が解明されておらず、明らかな検査手段も報告されていないため、In-WBC の集積を認めることは、早期の治療とその病態の解明に寄与する可能性があると考え報告する。

**161** 虚血性心疾患に対する PTCA 後早期の <sup>201</sup>Tl 負荷心筋 SPECT 所見の検討

小坂 一英, 石野 洋一, 中田 肇 (産業医大放)

虚血性心疾患に対する再灌流治療後、比較的早期 (10 日以内) に施行された負荷 <sup>201</sup>Tl 心筋 SPECT 所見が治療効果を十分反映するか検討した。対象は虚血性心疾患と診断され PTCA が施行された症例中、遠隔期に再狭窄の認められなかった 10 例 (OMI 6 例, angina 4 例)。PTCA 後 10 日以内と 3 ヶ月以降とに負荷 <sup>201</sup>Tl 心筋 SPECT を施行し、その結果をスコア法で半定量的に解析した。負荷後早期像における欠損スコアは、PTCA 後 10 日以内から遠隔期にかけて有意に減少した。また 10 日以内の再分布の程度は遠隔期に比べて有意に高く、この時点で一見残存虚血があるように見える症例も存在した。再灌流治療後の Tl 摂取能の回復遅延がその一因であり、この時期の負荷心筋 SPECT は治療効果を十分には反映していないと考えられる。